

コロナ禍に想う — 濱口梧陵の近代医学への貢献 —

白 岩 昌 和

はじめに

二〇二〇年二月十三日、和歌山県では有田地域の病院に勤める男性医師が新型コロナウイルスに感染したことが最初に確認された。その後、日本社会は繰り返し返される感染拡大の波による「コロナ禍」に翻弄されている。二〇二〇年はラフカディオ・ハーン(Patrick Lafcadio Hearn)によつて「生神(A Living God)」として海外に紹介された郷土の先人濱口梧陵(一八二〇—一八八五、以降梧陵)の生誕二〇〇年であった。安政元年(一八五四)に発生した地震によつて起こった津波から村人を救った人物として記憶されている人も多いかと思うが、梧陵が日本の医療の発展にも貢献したことは殆ど知られていないのではないだろうか。また、梧陵と親交のあった福澤諭吉(以降福澤)についても、近代日本の「公衆衛生」の確立という観点からの評価はされていないように思う。

明治十六年(一八八三)に発足し、近代日本の衛生・公衆衛生の発展に大きな影響を与えた衛生啓蒙団体である「大日本私立衛生会」の初代会頭佐野常民(日本赤十字社初代社長)が、同会の発会に際して、次のような祝詞を述べて、当時の「衛生」の意義を論じている。

夫レ一國ハ一家ノ積ナリ一家ハ一人ノ積ナリ吾人各自ノ健否ハ我国貧富強弱ノ関スル所ナリ衛生ノ法豈講セザルベケンヤ

我国人ハ欧米人ニ比スレハ身体^{おうちやく}脆弱ナルコト衆人ノ熟知スル所ナリ既ニ脆弱ナリ故ニ疾病亦多カラザルヲ得ズ試ニ欧米人ニ較シテ其ノ劳作ノ程度ヲ計ランニ体力ノ弱キヲ以テ既ニ幾分ヲ輸シ疾病休養ノ多キヲ以テ又幾分ヲ輸セバ其比例或ハ欧米人ノ劳作ヲ為サント欲セハ邦人二人ヲ要スルニ当ルモ亦知ルベカラズ

この祝辞の内容は福澤の説く「独立自尊」の理念にも通じるように感じる。「個人衛生(個人、家族の健康)」の積み重ねが「公衆衛生(国の安寧)」につながる。今まさに我々が今回の「コロナ禍」を経験して感じるところではないだろうか。本稿では、福澤など福澤に関係のあった医師や行政に関わる人物を通して福澤が日本医学史に残した足跡をたどり、日本に於ける近代医学・公衆衛生の礎となった「事始」に関わった紀州人及び福澤に縁のあった人物を紹介する。

緒方洪庵とその周辺の人物

福澤と福澤が共に親交のあったのが「日本近代医学の祖」と言われる緒方洪庵である。文政九年(一八二六)、洪庵は中天游の開いた大阪蘭学の拠点であった「思々斎塾」に入塾し、その四年後には恩師天游の勧めで江戸の蘭医坪井信道の塾で学ぶことになる。洪庵、二二歳の時である。信道は、早々に洪庵の才能を評価して塾頭に抜擢し、自らの師である宇田川榛斎に紹介する。洪庵は二三歳にして『人身窮理学小解』(写本)を訳すなど頭角を現すが、天保六年(一八三五)天游の死去もあり帰阪する。天游の恩に報いる為に嗣子耕介の後見人となって旧師の塾で蘭学を教えた。中家を従弟伊三郎が継ぐことになり、洪庵は翌年二月耕介を伴って念願だった長崎に旅立つ。天保九年

四月に大阪に戻り瓦町に福澤との出会いの場ともなる「適塾」を開き同年七月には福澤が「阿母おっかさん」と慕った八重と結婚する。なお、前述の「衛生」の意義を論じた佐野常民も福澤と同じく「適塾」の門下生であったのは周知のことである。

梧陵と洪庵の関係は、杉村楚人冠(廣太郎)著『濱口梧陵伝』²⁾の「人材育成」の章にある次の記述などからもわかる。

是より先、梧陵は武術の稽古と共に、學問教授の必要を感じ、子弟の為に良師を得んとし、嘉永六年出府の際も、緒方洪庵の紹介に依り、江戸に於て三谷昌連と云える者に面會したれど、同人の癡狂せるが為、終に之を果す能はざりき。當時緒方洪庵は大阪にありて蘭學を教授し、江戸に於ける杉田成卿と相對して、蘭學界の二大重鎮を以て目せられ居たが、梧陵は豫てより相識の間柄なりしより、再び洪庵に向つて後任者の推薦を依頼したり。翌安政元年洪庵の周旋し來れるは、即ち小野石齋にして、當時彼に宛てて來れる紹介状左の如し。(五二頁)

嘉永五年(一八五二)、梧陵は武術の稽古と共に村人が學問を習えるように「稽古場」(耐久社)を広村に開設する。その稽古場の教師として小野石齋という人物が洪庵によって推薦されたことがわかる梧陵に宛てた書簡が、濱口家に所蔵されている。このことから、梧陵と洪庵の関係は江戸・お玉ヶ池に種痘所が開設される以前から続いていたと言える。

洪庵の大阪に於ける活動は、文久二年(一八六二)までの二十四年間だが、医師としての診療の他にも蘭学者として訳述や著書に専念し、梧陵の稽古場に良師を派遣するなど教育者として人材を育成した。また、公衆衛生の仕事や予防医学、ことに種痘事業に尽力した³⁾。緒方家本家の洪庵の曾孫準一氏が手がけられた尼崎町「除痘館跡」記念銘板には次の通り刻まれている。

大阪の除痘館は牛痘種痘をおこなう場所として緒方洪庵(1810-1863)が中心になって嘉永2年11月7日(1849)に古手町(道修町)に開設した。それは痘苗がはじめて長崎へ渡来した年である。大阪の種痘活動はまことにさかんで安政5年4月24日(1858)には全国にさががけて官許を得た。のち万延元年10月(1860)にはこの場所すなわち当時の尼崎町1丁目。現在の今橋3丁目に移って事業を拡張した。

千葉県銚子市の中央町にある大阪屋薬局の近くには、梧陵の名前が刻まれた石碑と、梧陵が経済的な支援をした蘭学医関寛齋が安政三年(一八五六)二月十五日に開業した医院跡記念の石碑が並んで設置されている。

佐倉順天堂で佐藤泰然から医学を学んだ寛齋が梧陵との運命的な出会いを果たしたのが、開業から二ヶ月後の四月であった。梧陵は、親友であり、お玉ヶ池の「西洋種痘所」の開設に関わった蘭学医でもある三宅良齋を介して順天堂にいた寛齋の存在を以前から知っていたと考えられる。また、大阪の洪庵からも『虎狼痢治準』(洪庵訳述、一八五八)に記載された治療法や予防法について聞いていたとも考えられる。

『濱口梧陵伝』には、当時の様子がうかがえる次の記述がある。

安政五年コレラ流行し、江戸を中心として最も猖獗を極めたる時、恰も江戸にありし梧陵は大いにこれを憂慮し、銚子に於ける店の支配人及び同地の開業医関寛齋に一書を送りて曰く『未だ銚子にはコレラの発生を見ざるも、目下江戸に於て猖獗を極め居れる此の悪疫は、早晚銚子方面にも蔓延すべきを覚悟せざる可からず。されば其の蔓延するに先ち、之が予防及び治療法を研究し置くの必要あり。一切の費用は濱口家に於て負担すべきを以て、寛齋をして急ぎ出府せしむべし』と。茲に於て寛齋は俄に一名の従者を伴いて銚子を発足し、昼夜兼行出府したり。(一〇四—一〇五頁)

梧陵は、寛齋をコレラ疫病の為に安政五年(一八五八)五月七日に創設された「西洋種痘所」の林洞海と良齋に紹介し、臨牀的にコレラ患者の治療法を学ばせ、実地に就かせ様々な予防法を研究する機会を与えた。一通り研究を

終えた寛齋は、予防薬や治療に必要な薬品類、関連する書物を購入して銚子に戻るが、梧陵の予想通り銚子でもコレラの感染が始まっていた。寛齋は、銚子に帰るや否や江戸で学んできた予防法を応用し、当時の最先端の治療を患者に施すことで銚子でのコレラの大流行を防ぐことに成功したのである。⁷⁾

梧陵の医学界への貢献はこれだけではない。寛齋がコレラの予防法、治療法を学んだ種痘所が、設立後わずか半年で、同年十一月十五日の未明に神田相生町からおこった火事によって類焼してしまう。それが神田川を隔てた和泉橋通りに翌年九月に再建される。この時、再建のきっかけとなったのが梧陵による多額の寄付だったという。再建された種痘所が発展し、現在の東京大学医学部につながるのである。

他にも、文久二年に出版された医学書『七新薬』の出版に関わる費用を援助するなど、梧陵は日本の近代医学の発展にも深く関わっている。本書はその例言九則のなかで述べられているように、長崎医学伝習所におけるポンペ(Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort)の薬理学講義で得た内容およびウーステルン(Oesterlen)とワグネル(Wagner)の薬物書を参考にして司馬凌海⁸⁾が著述し、関寛齋⁹⁾が校閲したもので肝油などの健康作用を説明し、筑前・肥前における肝油の製造概要を紹介している。それより二年前の万延元年(一八六〇)五月に『七新薬』の凌海の自筆稿本である『七新薬説』で既に「肝油」という用語を用いて薬効・性状・製造法についての記述があり、肝油の製造状況についても言及されている。「武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介」¹¹⁾を始めとする諸資料によって安政六年に肝油の試作が始り、文久元年には『乾薬韻府』¹²⁾を手引書にした製造に成功していたことがわかっている。武谷裕之(椋亭、適塾出身)は、親しく交際していた洪庵他、江戸や大阪の著名な蘭方医戸塚静海、川本幸民、箕作秋坪、宇田川興齋らに、肝油の製品見本を送るとともに注文にも応じていた。

御手製肝油壺瓶被下置千万要性有仕合御序之節可然御取成御礼宜被仰上可被下候。殊之外能ク出来候。抹魚者本邦にてハ始而之製珍敷奉存。海鰯魚和名拙者不申候。御序ニ御為聞可被下候。¹³⁾

安政五年十月十八日、ポンペは、梧陵とも交流のあった勝麟太郎らと共に幕府軍艦で博多湾に寄港し、同二十二日まで滞在している。十一代福岡藩主黒田長溥は箱崎茶屋の別館にポンペ一行を歓待して、ポンペから西洋医学の状況を聞き、西洋医学の普及と教育の重要性を知る。その際、ポンペは長溥の持病であるリュウマチの病状を診察し、肝油の服用を勧めている¹⁴。

その後、学校での肝油服用が、生徒の健康回復、維持に果たした役割が調査されている。大正十四年(一九二五)、虚弱児童対策の一環として、広島市学校衛生医学会が市立高等女学校で肝油の集団服用を始めたのが最初と考えられている。また戦中・戦後混乱期の低栄養状態のなかで成長を促進し、集団生活をする学童期の結核・インフルエンザを初めとする集団流行の感染症予防に効果があつたと言われている¹⁵。

紀州に於ける医学の発展

紀州藩五代藩主徳川吉宗が、江戸幕府八代將軍(在位一七一六—一七四六)となり、「享保の改革」のなかで殖産興業に西洋の学術の必要性を認め、その導入をはかった。その一環として、享保五年(一七二〇)にキリスト教以外の洋書輸入の禁書令を緩和したが、わが国に蘭学を根付かせる結果となった。『解体新書』の出版(一七七四)を画期とする蘭学の興隆で、西洋医学は長崎の出島を唯一の窓口として、医書の輸入や蘭館医によって移入されるようになった。しかし、本格的な医学の移入は文政六年、シーボルト(Philipp Franz von Siebold)の来朝以降と考えられている。

小泉栄次郎は、『漢法方劑の新研究…総論』(南江堂、一九四三)の「漢医法史略」中で江戸時代の中世期(六代將軍家宣から十代將軍家治の七十八年間)の医法(古法派)について次のように書いている。

是より先き五代將軍綱吉の時代に硯儒伊藤仁齋の門人に才学徳望の高かりし並河天民は曰く儒者にして医を兼ねるも敢えて儒教に害を及ぼすべきものにあらず。儒者は食録を得て儒教を講じ得るものあれども、然らざる者は安じて其の職を全うし得ざるべしとて、自ら儒にして医を兼ねたり。時には良山は門人香川修徳に勧めて仁齋の門に入らせ儒教を学ばしめたり。仁齋は儒医合体の説を排したれども、修徳は天民と俱に其説を固守したる為、其説漸次に旺になり遂に儒にして医を兼ねる者輩出し、所謂儒医一本論なるもの台頭し来り、反て伴侶にして医たる者は是より漸次に其影を潜むるに至れり。(二七一―二八頁)

「技術」と「倫理」が医学に求められるようになったのは、この頃だったのではないだろうか。江戸中期は「古医法」の勃興期とも小泉は記している。

江戸時代初期に曲直瀬正慶が、季朱の医法を我が国に普及せしめし以後は名古屋玄医が古医法を唱称し、重ねて後藤良山及び其門人等により古医法の振興を図りつつ、六七十年を経過せし八代將軍吉宗の寛保・延享(一七四一―一七四七)の頃、古法家の山脇東洋が禁裏の医者として名声の高かりし時に、豪傑の気風ありし、安芸の人・吉益東洞なる者、京都に來り医たらんとしたりが、落魄困窮し居りし時に、東洋の知遇を得て遂に一家を樹つるに至れり。(二九一―三〇頁)

吉益東洞門下生の系譜の中に華岡青洲の名前が見受けられる。漢方と蘭方の長所を選択し、新たな知見を求めた「漢蘭折衷派」と言われるのが紀州藩外科医の青洲たちであった。青洲は二二歳の時、紀州から京都に出て古医法を吉益南涯に三か月、蘭方のカスパル¹⁶流外科を大和見立に一年学び、自らは二十年の歳月をかけて「通仙散¹⁷」と称する麻酔剤の調合を完成させた。それを用いて文化元年(一八〇四)閏十月十三日、六十歳の女性の乳癌の手術を成功させた。麻酔薬の効果を実母と妻に試験的に用いて、妻加恵が失明した物語は今も人々に語り継がれているが、「内外合一」、「活物窮理」という青洲の医療理念に基づいた鎖肛、口唇裂、鎖陰(膾閉鎖)、尿道結石、脱疽、痔瘻

などの手術も実施している。その全身麻酔法が欧米に先んじていながら発展を見なかったと一部で批評されるのは、その医療法を公開せず、秘伝として子孫や高弟に限って伝える傾向があったためとされる¹⁸。それでも紀ノ川の上流の那賀郡名手莊平山(春林軒)には、全国から千人を超える入門者が集まった¹⁹。「華岡医塾門人録」²⁰には、有田郡内からも三人が入門していたことが記されている。

母親の於継^{おつぎ}の意志もあり地元に残まった青洲²²だが、兄の意を受けた末弟の華岡鹿城は、文化八年ごろ、堺の少林寺町で診療所を開いた。文化十三年には蔵屋敷が建ち並ぶ大坂・中之島に移り、「春林軒」の分塾を開設し、論語・雍也篇にある「知者楽水」から「合水堂」(楽水堂)と名付けた。大坂への進出によって華岡流外科を更に広め、安定的に入門者を確保することに成功する。「春林軒」への入門者は堺の診療所開設とともに前年の十四人から三八人に増え、「合水堂」開塾の年には四九人になっている。「合水堂」は鹿城没後も、青洲の養子で娘婿の南洋、鹿城の息子の積軒が支えた。門人は一七八〇年から一八八二年の間、北海道から鹿児島まで全国各地から二二〇〇人に及び、その半数が大坂の「合水堂」で学んだ。合水堂は西洋医学が本格的に入ってくるまで、わが国の医学の発展に大きく貢献し、医学専門塾としては比類ない規模を誇った。

『福翁自伝』の記述が示す通り福澤を含め適塾の塾生は「合水堂」の塾生をライバル視していた。「緒方塾の近傍、中之島に華岡という漢医の大家があつて、その塾の書生はいずれも福生とみえ服装も立派で、なかなかもつてわれわれ蘭学生の類ではない：ただ漢法医流の無学無術を罵倒して蘭学生の気焰を吐くばかりの事である」²³。

佐野常民や橋本左内などは洪庵と青洲から学んでいるが、「和歌山藩に初めて洋学を導入した先覚」と呼ばれる池田良輔²⁴も外科を青洲に学び、医と蘭学を洪庵に学んだとされる。医学だけでなく英仏独蘭の諸語に通じた池田²⁵の教えを受けた紀州人としてあげられるのが梧陵とも交流のあった陸奥宗光、鎌田栄吉、北島道龍、長屋喜彌太などで

ある。なお、池田の死を悼む福澤の手紙は、次の通り。

前月三十日の御手紙葬見仕候奪殿御事久々御病氣の処御養生不被爲叶途に御長逝のよし誠に絶言語驚入り候次第御一同様御愁傷の段深奉察候

御病中の事情を詳にせず御見舞も不申上不行届の段御海容被下度候

右は御返詞に兼て御悔申上度勾々如斯御座候

二十七年六月三日

論吉

池田富太郎様

前述の通り、安永三年（一七七四）秋、杉田玄白、前野良沢らによって『解体新書』が上梓され、献上本が配られた。翌年九月二十七日に須原屋市兵衛によって販売手続きがとられ一般にも知られるところとなる。『解体新書』の版元、須原屋市兵衛は江戸中・後期の書肆で、屋号は申椒堂、本拠を紀伊国有田郡栖原村（現在の湯浅町栖原）とする栖原屋茂兵衛（千鐘房）の分家として江戸日本橋で開業した。『解体新書』の出版から五十年、文政九年に出版された『重訂解体新書』（玄白による凡例の追加、改訳など）は須原屋茂兵衛によるものだった。湯浅町前教育長故垣内貞氏から頂いた垣内家と菊池家(27)の關係を示す系図の中に、梧陵の妻まつと須原屋茂兵衛（四代北圃茂兵衛）の名前が確認できる。興味深いのは、垣内家からは多くの医者が輩出され、垣内東臯は享保年間、紀州六代藩主宗直に礼見し、ついで豊前中津藩主奥平昌春に招聘され、侍医として仕え二〇〇石を下贈されている。(30)

東臯が、その後の中津藩と紀州藩の人脈に関わっていたかは定かではないが、両藩の医を介しての交流のきっかけになったのではないだろうか。福澤と梧陵を引き合わせたのも二人の医師である。山口良蔵は、福澤が蘭学を勤

しむ適塾での同僚として、特別に親しい関係にあったことが書簡によく現われている。福澤の適塾入門は、『適々齊塾姓名録』によれば、安政二年三月九日で、良蔵（入塾当時は良哉）の入門は、それから一年後の「安政三丙辰仲春朔日」となっている。良蔵の入門時、福澤は二一歳であったから、彼はまだ十七歳だったということになる。福澤は、『自伝』のなかで、「莫逆の友なし」と啖呵をきっているが、それにも関わらず、良蔵は諭吉が心を許した数少ない友人のひとりではなかったか。³¹ 紀州高野山の寺領安楽川莊出身の松山棟庵（一八三九—一九一九）は江戸に向かう船で出会った良蔵の勧めで慶應二年鉄砲洲の福沢塾に入塾する。京都に出て新宮涼民から蘭方医学を学び安政六年に帰郷するが、数年は医療に従事することはなかった。しかし、湯浅村の豪族「網清」^{あみせい}から招かれて少女を往診したことがきっかけで一族の信用を得て、湯浅村で開業する。だが、和歌山で開業していた義兄上田春庭（姉於菅の夫）が病没したことで、義兄の遺業を継ぐために湯浅村を離れることになる。福澤塾で英語を学び、明治元年（一八六八）一月から六ヶ月間、横浜在留のヘボンに師事し、翌年二月から明治三年十二月まで和歌山で医に従事する。³² 梧陵とともに洋学校「共立学舎」を現在の和歌山市内に創設したのはこの頃である。³³ 明治四年、大学東校に出身し、大助教授となるが、同年十月には中津藩に福澤の発意で創設された市学校（天保義社の資本金から抽出）に小幡篤次郎と共に赴任する為に辞職している。明治六年十月に慶應義塾医学所が創設された際、医学所長を棟庵が務めた（棟庵の実兄の長男新宮涼介が教師兼監事を務めた）。

なお、慶應義塾医学所の創設の動機として伝えられている記載がいくつかあるが、いずれの記載にも前田政四郎³⁴が登場する。福澤の医の実践にも多くの紀州の人材が関わっていたのである。

慶應義塾医学所

すすみゆく世に生まれたるうなるにも昔のことは教へおかむな

よきをとりあしきをすてて外国におとらぬ国となすよしもがな

時代の進歩が急速で日本の近代化も着実な状況で生まれた「うなる」(幼童)にも、これまでの先人が積み上げてきた文化遺産の諸成果を、欧米諸国の先進的な文明と同じく、きちんと伝えていって欲しいとの国民への要望と明治天皇の開明性、進取性の信条が表された二首の御製である。³⁶⁾

日本での近代化が進むに乗じて、医学教育にも変革の時が来る。慶應義塾に於ける医学所、医学部創設の経緯とその時代背景を辿ってみたい。福澤は、明治六年に慶應義塾医学所を発足させ、約三〇〇人の医師を養成したが医育制度の変化、西南戦争の影響、財政負担の問題などから明治十三年に廃校とした。福澤は明治三十四年(一九〇一)に逝去したが、義塾には大正六年に北里柴三郎博士を中心に医学部が創設された、医学所と医学部の間には三十七年の空白があり、機構上の連続性は無いが、底流には福澤の自然科学志向、理科系教育重視の意思が脈々と流れていた。³⁷⁾

コロナ禍に想う

今回の新型コロナウイルス感染で日本中にその名前が知られるようになった米国の大学がある。一八七六年、ドイツ医学方式を取り入れて発足したジョーンズ・ホプキンス大学(JHU)の医学部である。日本に二人のドイツ医師が赴任した時期、即ち日本に於けるドイツ医学受容の開始時期(一八七一年)とほぼ同時期と言える。米国独立の初期に存在した医科系の学校は五校のみであった。程度の低い医学校の乱立で、梧陵が米国視察に赴いた頃³⁸⁾には六

○校を数えた。米国医学教育史の中で一七〇一―一八世紀は不毛の時期であったと言われる。ハーバード大学のエリオット(Charles William Eliot)学長は学生の学力の低下を警告し、米国医学を支えているものは、ヨーロッパ諸国に留学した少数の医師のみであると極言した。留学先はその国の医学の隆盛の程度に平行し、イギリス、フランスからドイツへと移動した。JHUの創立は米国の独立から既に一〇〇年が経過してはいたとはいえ社会変動の時期であり、同じく政治体制の大変革によって医育制度の選択が迫られていた明治維新直後の日本の状況に似ている。⁽⁴¹⁾

米国で最初の「公衆衛生」を専門とする大学が一九一六年にJHUに新設されるが、その費用はロックフェラー財団から提供された。慶應義塾大学医学部が同財団の恩恵を受けているのも興味深いことである。慶應義塾に於いては、昭和四年(一九二九)、現在も教室が使用されている予防医学校舎が同財団チャイナメデイカルボードからの寄附とともに建設された。JHUへの留学後、広く日本の医学の国際化に尽力した草間良男、当時の教室在籍者で、国立療養所長島愛生園園長等として日本のハンセン病対策に一生を捧げた高島重孝(皮膚科医)、国立公衆衛生院衛生統計学部長等として日本の衛生統計学・遺伝統計学を切り拓いた川上理一(眼科医)など、多くの衛生学、公衆衛生学分野での先駆者が輩出されている。⁽⁴²⁾

公衆衛生の黎明期と福澤諭吉

先に述べた通り、蘭学の芽生えは八代将軍徳川吉宗の時代である。吉宗は殖産興業、国産化奨励の方針から海外の物産に関心を示し、馬匹改良のため享保十年など数回オランダ船により西洋馬を輸入、ドイツ生まれの馬術師ケイズルを招いて洋式馬術、馬医学を学ばせた。また、一七二八年、外国産馬を輸入した際にインド産の白牛も三頭輸入し、慶長十九年(一六一四)幕府直轄地となった嶺岡牧で繁殖を始めた。乳製品は「白牛酪」⁽⁴³⁾と呼ばれ、バター

のようなものだったらしい。滋養強壮や解熱用の薬として將軍家にも献上されたという。吉宗が初めて放牧した白牛は雄一頭、雌二頭の三頭だったが、嶺岡牧ではこれをもとに数を増やし、六十四年後の寛政四年（一七九二）には約七〇頭までになったといわれている。

徳川幕府は雉子橋御厩で牛を飼育し將軍に牛乳及び乳製品を供していたが、明治政府になると由利公正が雉子橋厩舎に前田留吉を雇用し、搾取法を一般の牧夫に伝授した。厩舎が廃止になると、横浜に住む英国人から乳牛及び製造機具を買い、明治二年に「築地牛馬会社」を設立した。引き続き前田を起用し搾乳技術の指導に従事させ広く普及啓蒙を図った。その頃、福澤は腸チフスにかかり牛乳を飲んで回復した事を牛馬会社への札状に書いて、牛乳を宣伝している。『牛肉之説』では、当時の日本人に対して栄養面から食生活を改善すべく肉食を薦めている。^④

此亦人の天性なれば、若し此性に戻り肉類のみを喰ひ或は五穀草木のみを喰ふときは必ず身心虚弱に陥り、不意の病に罹て斃る、歟、又は短命ならざるも生て甲斐なき病身にて、生涯の樂なかるべし。古來我日本國は農業をつとめ、人の常食五穀を用ひ肉類を喰ふこと稀にして、人身の榮養一方に偏り自から病弱の者多ければ、今より大に牧羊羊の法を開き、其肉を用ひ其乳汁を飲み滋養の缺を補ふべき筈なれども、數千百年の久しき、一國の風俗を成し、肉食を穢たるもの、如く云ひなし、妄に之を嫌ふ者多し。畢竟人の天性を知らず人身の窮理を辨へざる無學文盲の空論なり。

福澤が大坂の塾塾で塾長を務めていた当時安政四〜五年（一八五七〜五八）、他の塾生とともに牛鍋屋で食べ、飲んだという記述が『福翁自伝』には見られる。一八五九年の開国以前の話である。七世紀後半、天武天皇が肉食の禁止を発令して以来、日本人は、実に千二百年の長きにわたり牛肉を食べることを禁じられ、当時もご禁制の品であった。わが国で肉食の禁が解かれたのは、明治四年（一八七二）十二月のことである。翌年一月、明治天皇は自ら牛肉を試食された。こうして文明開化の先陣を切って、食肉文化は日本人に浸透していくが、これには「食」を含

めた西洋文明導入のオピニオンリーダーとしての福澤の影響が大きかったと思われる。

「すき焼き」を始めとする牛肉食が流行する数年前から、中川嘉兵衛は、その流行を見越して、江戸時代末期の慶応三年（一八六七）に、武蔵国荏原郡今里村（現在の白金）の名主だった堀越藤吉から土地を借りて牛屠場を開設した。まだ牛肉は手に入りやすく品薄であり、屠牛や牛肉食にはかなり抵抗の強い時代である。しかも冷蔵技術も無かった為に、横浜にあった公設の屠牛場から江戸まで移送する際に、牛肉が傷んでしまう事も多かった。そこで嘉兵衛は、江戸での屠牛場開設を計画した。

同年五月から、遂に江戸において、初の牛肉販売が始まることになる。『明治物事起原』には同年十二月版の「万国新聞紙」第九集に掲載された「中川屋」の広告が紹介されている。

各国公使館用辨の為、牛肉店高輪開候處、御薬用旁諸家様より御用被仰付、日に増繁榮仕、遠路運び出来兼候に付、今般柳原へ出張賣弘申候間、澤山御買取之程奉願候。

江戸柳原請負 中川屋

また、「当時芝新銀座に慶應義塾出来、塾長の福澤先生や、光明寺三郎氏などは、客筋なりし」との記述もあることから、中川屋には福澤が頻繁に通っていたことも想像できる。

その後、嘉兵衛は製氷ビジネスに本格的に乗り出したために肉食業から手を引くことになるが、これにも福澤が大きく関わっている。明治三年五月中旬、福澤は発疹チフスを発症する。福井藩主松平春嶽が外国製の小型製氷機を所有していたことを聞いた慶應義塾の塾生が借り受け、大学東校（東京大学）の宇都宮三郎教授がこのアンモニア蒸発式の製氷機で製氷し、福澤の解熱に役立てたとされる。身を以て嘉兵衛に道を示したとも言える。この時には、眼科医であるヘボン（James Curtis Hepburn）は治療法がわからず、白羽の矢が立ったデュアン・B・シモンズ（Duane B. Simmons）が治療にあたった。それ以来、福澤はシモンズを非常に厚遇し、後に、慶應義塾構内に住まわせるようにもなる。滞米中の梧陵の世話を福澤から任されたのもシモンズであった。

世界的には、一九世紀に入ると天然氷の利用が一般市民に広がって行き、天然の氷を大規模に切り出して遠隔地へ輸送・販売するビジネスが生まれた。一八〇六年には米国ニューヨーク地方の湖沼の水を販売する事業が始まり、ボストン港から世界各地へ輸出され始める。これは「氷王」と呼ばれたチューダー (Ferdic Tudor) が始めた事業として知られている。チューダーは、ボストンの裕福な法律家の家庭に生まれたが、若い時からビジネスを志し、二三才の時、ボストン近郊の池から氷を切り出し、帆船に積んでハーンが来日を果たす前に数年間を過ごしたことでも知られるカリブ海のマルティニーク島まで運ぶことに成功した。航海には約二週間を要したが、その間の保冷技術としては、安価に入手できるタン樹皮で船艙を覆っていた。これは、チューダーがカリブ海の諸島には米国からの多くの輸送船がほとんど空荷で来港して果物などの荷物を積み込んで帰っていくのに着目して思いついた事業と言われている⁽⁴⁸⁾。

牛肉や牛乳を取り扱う上で、腐敗防止や品質保持は大きな課題だったのである。また嘉兵衛は前述のヘボン博士などからも、食品衛生における氷の有益性を教示されていた。函館・五稜郭の良好な水質と船便での利便性に目をつけた嘉兵衛は榎本武揚の援助も得ながら、当時の北海道開拓使・黒田清隆から五稜郭における七年間の採水専取権を獲得することに成功した。慶応三年、函館に渡った嘉兵衛は、全財産を投入して六回目の採水に挑戦するが、その年の暖冬で薄い氷しかできず、二五〇トの水を横浜に搬送するも大損失を被ることになる。しかし、二年後の明治元年、嘉兵衛は七回目の挑戦の末に良質の天然氷約五〇〇トを採水し、それらを販売することに成功したのである。その後、嘉兵衛の水事業は順調に成長し、翌年の生産量は六〇〇ト、一八八二年には三四〇〇トに達している。一八七一年には函館の豊川町に貯水庫を建設し、更に一八七三年には日本橋の箱崎町に輸出の為の大型水室を建設する。その後の四年間での清国、韓国、シンガポール、インドなどへの総輸出量は、約八〇〇〇トにも達したという。その間の純利益は、今日の貨幣価値に換算すると三八兆円という莫大なものであった⁽⁴⁹⁾。

横浜に出て塵芥処理の人夫などをしていた嘉兵衛だが、前述のシモンズに認められてその雇人となる。公使館にもコックとして務めるようになった嘉兵衛は、その交流から外国人の飲む「牛乳」の需要に目をつけるようになる。文久元年に横浜の洲干弁天付近(関内)で搾乳・牛乳販売業を始め、シモンズなどを介して囃話した牛乳の販売を開国以来、横浜外国人居留地に増えてきた外国人に始める。この搾乳業がようやく軌道に乗りかけた頃、横浜の搾乳場が火災にあい、乳牛二頭もろとも焼失してしまう。火災の報を聞いたシモンズは、馬で駆けつけ、焼死した乳牛をみて、「中川は牛の丸焼きをつくった」と冗談をとばして嘉兵衛を元気づけたという。後に嘉兵衛が牛食肉業に着手するようになったことを考えれば、面白いエピソードとも言える。⁵⁰⁾

なお、明治二十一年(一八八八)の農務局畜産掛の調査資料には、明治初年以降東京の民間人が輸入した乳牛品種の記録がある。明治十八年、梧州とも親交のあった津田出は千葉・茨城県境に広大な原野の払い下げを受け、桑園と酪農の経営を試みようとジャージー種牝牡牛十九頭、同年ホルスタイン種牝牡六頭を米国から輸入している。結果的には、津田による大規模農場経営は失敗に終わるが、梧州がニューヨークで客死した年の出来事である。邦字新聞記事から、津田が乳牛をSan Luis Obispoの Steele 兄弟の牧場から輸入した可能性⁵¹⁾がわかった。滞米中の梧州らが西海岸を後にする直前には、津田の長男道太郎が陸路でサンフランシスコに向かっていたことから、乳牛の買い付けにも梧州が関わっていたのではないだろうか。当時の紀州人特有の「新しい物好き」の系譜⁵²⁾を感じる。

明治三十二年、愛光舎の角倉賀道⁵³⁾が米国から帰朝して牛乳を消毒し始める。この頃から東京では生乳の販売がなくなり、殺菌牛乳にかわったが、規則としては殺菌を命じられていない。搾取業者が自発的に工夫をこらしたもので、「牛乳営業取締規則」⁵⁴⁾では、搾乳所の構造、牛乳成分の構成、容器などが規制されるが、昭和八年大改正まで牛乳の殺菌には触れられることはなかった。ただこの規則の発布がきっかけとなり、搾取業は郊外に移転していく。

公衆衛生に自ら取り組んだ搾乳業者は設備投資の問題を抱えて、家業から企業へと形態をかえながら近代化に向かったのである⁽⁵⁶⁾。

健康と衛生に関する歴史認識

医学書を含む県立耐久高校などに蔵書されている『梧陵文庫』⁽⁵⁷⁾と呼ばれる古書のコレクションからも想像できることだが、「おおよそ江戸時代の人々は、貝原益軒の『養生訓』にあるような、通俗的な日常訓・道德訓に関連した心身の整序の世界に生きていた。しかし、この養生論は、一九世紀後半の種痘とコレラ流行により人々の日常生活とは断絶してしまった」⁽⁵⁸⁾。そして今、我々は新型コロナウイルス感染症によって、これまで築き上げて来た「日常生活」を如何に変容させるべきか悩んでいるのである。

明治十年（一八七七）の西南戦争後の兵士の移動時のコレラの流行などを経験した日本では、それまで風土的特性からある程度許容されていた裸体や裸足の習俗を取り締まり、散髪や入浴の奨励、調理法や栄養面の指導など、個人の健康維持を名目にして環境衛生の徹底、生活様式の西欧化、近代化をはかるための規制や指導が数々行われるようになる。当時「健康」という言葉はまだ一般的ではなかったが、国民が近代国家、あるいは軍事強国の国民にふさわしい立派な身体を持ち、病気にかからないように統制、指導することは国の重要な政策課題であった。地域社会や職場に「衛生組合」を組織して成員の健康状態を相互監視する体制をつくり、また、全国的に実施する児童生徒の体格検査や衛生調査のデータを国が一元的に管理するようになったのである。

『国立衛生試験所百年史』⁽⁵⁹⁾によれば、当時原因不明のコレラの防疫対策としては、横浜十全病院医師であったシモンズが消毒液として指示したと伝えられる石炭酸だけが頼みの綱であった。外国に大量発注したが急場には合わ

ず、一時に需要が殺到して在庫が底をつき、一ポンド五〇銭だった価格が二八円に暴騰し、防疫にも支障を来した。石炭酸は明治十年二月公布の「毒薬劇薬取扱規則」の劇薬に指定直後であったことから、衛生局は非常措置として九月二十七日布達で「五十倍以上ノ水ニ溶解シタル分及ビ他ノ薬物ト混和調整シタ分」を地方庁に限り販売を許している。

シモンズには、神奈川県に信頼できる理解者がいた。神奈川県権令大江卓である。保健衛生に熱心であった大江は、シモンズが市民医療に専念できるように努力する。明治五年頃、前年春に作られた仮病院が火事によって焼失し、横浜では病院がなく市民が困っていた。このため、大江は民間によびかけ病院設置に奔走する一方、慶應義塾で英学を学んで丸屋商店(後の丸善)を横浜で創めていた早矢仕有的、「医官総括」として松山棟庵からも開院に尽力する。彼らの願いが叶い、同年九月に市中共立病院が開院される。更に大江は、シモンズを本病院の委任医師とするため、明治六年五月に大蔵省へ伺い、彼を神奈川県雇医として任用(同年九月)する。この病院ではいち早く困窮者治療が実施されるが、これは弱者救済に信念を持つ大江と元宣教師で慈恵医療の志を持つシモンズの意向によるものだった⁽⁶¹⁾。シモンズは診療面で日本通の名医として評判を得た他、売薬取締の必要の提言、医学書の著述(『微毒小箒』は、シモンズが講述したものを近藤良薫が筆記、棟庵が校閲したもの)、コレラ対策(神奈川県令陸奥宗光宛に「防恙法建立執行之儀」と題する建議を提出し、港湾検疫の実施した)、種痘の普及など多方面に腕を振るう。このようなシモンズを慕って各地から彼に師事しようとする者が多くいた。その中に若かりし頃の中濱東一郎がいた。東一郎の父・万次郎は、福澤と共に咸臨丸で渡米している。東一郎は東京大学医学部を卒業後、明治十八年に内務省御用掛となりドイツに留学し、帰朝後東京衛生試験所勤務となったことをきっかけに中央衛生委員として晩年まで活躍した。

「健康」は、西洋医学の生理学的解剖学的な概念を表示する専門用語として生まれた。洪庵が翻訳した『病学通

論』は日本で最初に病理学を紹介した書である。その中で洪庵は日本語としての医学用語を多く創作しているが、その一つが「健康」になる。⁽⁶³⁾ その「健康」が一般的な言葉になるのは、明治時代になってからである。その貢献度が高かったと思われるのは、やはり福澤である。万延元年、福澤は、中国の子卿という人物が米国で出版した『華英通語』（岡田屋嘉七、一八六〇）という中英辞書に、片仮名で英語の発音と日本語の訳語をつけた『増訂華英通語』（快堂蔵板、一八六〇）を出版した。同書には *health* という項目があるが、子卿による中国語の訳語「精神」があるだけで、福澤による日本語訳がない。⁽⁶⁴⁾

仮に「健康」という語を用いても、読者が西洋医学に通じていなければ、何のことだかわからないという意図があったように思える。『増訂華英通語』から六年後、慶応二年に出版した『西洋事情初編』で、初めて「健康」という言葉を使う。そして、『西洋事情外編』（一八六九）では *health* を「健康」と訳し、さらに、『学問のすすめ』第四篇（一八七四）でも「健康」という語を用いている。また、福澤とも親交のあった西周が、『学問のすすめ』第四篇が出版された翌年、『明六雑誌』第三八号で、「人世三宝説」という論文を発表している。

三宝とは何物なるやと云うに、第一に健康（まめ）、第二に知識（ちえ）、第三に富有（とみ）の三つのものなり。

西は、「健康」という漢字表記、見慣れない語が指している事柄が、当時の一般的日本人に馴染みのある日本語で言えば、「まめ」に相当するとしてルビを付している。福澤や西など明治初期の啓蒙家、有識者は、このような工夫をしながら、「健康」という漢字表現とその概念内容を流通させ、語彙、概念ともに、公的或いは政治的なものとして、普及していったのである。日本人の「身体」は、食文化の変容などと共に明治期に大きく変化した。この変化に影響があったのは、学校制度であったという。「健康」という概念も、学校教育を通じて流通・普及していき、日本人の身体を変化させたのである。この点に関して最もわかりやすい証拠は教科書である。⁽⁶⁵⁾

身体を、健康にせむと欲せば、つねに、飲食をつつしみ、清潔を旨とし、衣服の垢汚を去り、室内の空気を新

鮮ならしめ、もっぱら、摂生の法をまもるべし。万の病は、摂生の法を守らざるよりおこるもの多し。身体、健康ならざれば、忠孝の努めもおこなうこと能はず、人生の快樂もうること能はず。

『高等小学修身書』（國光社、一八八二）にある記述である。健康は「万事の本」——これは正にコロナ禍中の現代日本人が、感じていることでもあると思う。筆者には、感染予防のためには、「外食をひかえ、換気に心がけ、その予防対策を徹底する」とも読める。

「公衆衛生」という言葉は明治十六年五月二十七日の大日本私立衛生会創立總會において副会頭の長与専齋の発会祝詞に見られ「衛生」との異同や今日の「公衆衛生」に当たる意味を正確に述べている。⁽⁶⁶⁾ また、発足した大日本私立衛生会においては、専門委員に公衆衛生科を設けており、大正十二年には「大日本私立衛生会雑誌」の名称を「公衆衛生」へ改題している。「公衆衛生」という言葉は明治時代から既に使用されていることは明らかであるが、「衛生」の方が一般的であったと解される。⁽⁶⁷⁾

結びにかえて

明治十四年、悟陵は広村に私立病院（那耆病院）を創設している。当時の広村の住民が「衛生」についての意識が低いことを憂い、病に苦しむ住民を救うことが急務と考えての行動であった。京都で西洋医学を学んだ同郷の吉村英微^{えいしやう}を院長として招聘し、いち早く有田地域に西洋医学を実践する拠点を作ったのである。⁽⁶⁸⁾ 前年、和歌山県議会初代議長となった悟陵の先見性と医学に関する幅広い人脈が成し得たことである。

たまきはるいのちのかぎりきわめませ

いやはてしらぬむらさきのみち⁽⁶⁹⁾

梧陵の住民の「百世の安堵」を図るという想いがこのコロナ禍で現実のものになろうとしている。生業の伝統を墨守するヤマサ醤油が「うま味」の研究から発展させ、一九七〇年代から続けている核酸関連物質の五〇年以上にわたる研究の成果もあり、一九八〇年代からは修飾核酸の一つである「シユードウリジン⁽⁷⁰⁾」を医薬品原料として海外に輸出もしてきた。この医薬品原料こそが、現在日本でも新型コロナウイルス感染を収束させるべく接種が進められているワクチンに使われているのである。

注

(1) 瀧澤利行「明治期健康思想と社会・国家意識」(『日本医史学雑誌』五九一、三五―五五頁、日本医史学会、二〇一三年)。

(2) 杉村楚人冠『楚人冠全集第七卷』「濱口梧陵伝」(日本評論社、一九三七年)。

(3) 緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室「大阪の除痘館」(二〇一三)には、梧陵とも交流があったと考えられる日高郡(印南町)の医師羽山大学などに分苗されたこと明治元年二月二十二日)が記されている。また、『大阪の除痘館』には、洪庵開塾を三期に分けた年間入門者数が示されており、最初の八年間の平均が十一人、次の八年間が二五人、最後の期が三七人である。緒方富雄編著『緒方洪庵適々齋塾姓名録』(学校教育研究所、一九六七年)によれば、その総数は六三七人を数える。

(4) 石碑には以下の内容が記されている。「一八二〇(文政三年)〜一八八五(明治十八年) ヤマサ醤油七代目当主 関寛齋を経済的支援 コレラの防疫に貢献 日本近代医学の発展に寄与」。

(5) 石碑には以下の内容が記されている。「関寛齋ゆかりの地 一八三〇(天保元年)〜一九二二(大正元年) 東金市出身蘭方医 一八五六年銚子で医院開業濱口梧陵の支援を受け 当時流行していたコレラの被害から銚子市民を救った」。

- (6) 三宅良斎(一八一七—一八六八)は、十二歳で家督を継いだ梧陵が銚子で知遇を得た人物である。「西洋種痘所」設立に関わった蘭学医の一人で、奇しくも東京大学最初の医学博士である三宅秀の父でもある。「濱口梧陵伝」には、三宅秀による梧陵の渡米前後の健康状態に関する談話が記されている。「梧陵さんは明治十七年に米国に行かれる前、私の處へ来られて、平生御厄介になつてゐる胃病の方も、此の頃は大分好いようだが、洋行しても大丈夫だろうか」と相談された。梧陵さんは昔から却々健啖家で、西洋料理や鱈飯など二人前位平らげたものである。そして胃病は痼疾とも云うべく、胃拡張の気味で余程ふくれていた。それから幾分か心臓にも故障があつて、時々脈拍の打ち切れがした事もあつたが、心臓病と云うほどのものはなかつた。恁んな風に胃も悪く心臓にも一寸故障はあつたが、米国に於て亡くなられた原因は胃でも心臓でもない。それは米国で亡くなられた医師の検案書を見れば分かる。梧陵さんの遺骸が米国から着いた後、家族の方が右の検案書を持つて来てくれと云うことだったので、読んでみると、腸の下の方へ瘤が出来て、それが原因である事が分かつた。瘤と云うのは癌のようなものである。私は当時其の検案書を写し置いたが、探せば今でも宅にあるだろうと思う」(二五〇頁)。良斎以降も医家の系譜は、明治天皇の侍医でもあり、脳血管障害を発症した福澤諭吉を松山棟庵らと往診した三浦謙之助(秀の娘教の夫)などに引き継がれている(三浦恭定「祖父三浦謙之助の思い出」、日経事業出版センター、二〇一六年)。三浦謙一郎(謙之助孫)が発見したm(メッセンジャー)RNAのキャップ構造も今回のワクチン開発研究につながっている(東京大学先端科学技術研究センター、喜多山篤「先端を裏側から見る」https://www.rcastu-tokyo.ac.jp/research/sentan_relay033.html 最終閲覧二〇二二年十一月一日)。
- (7) 拙稿「新型コロナウイルス感染現地報告」(「地理」六五―五、五七―六七頁、古今書院、二〇二〇年)。
- (8) 司馬凌海(一八三九—一八七九)は佐渡国雑太郡新町村(二二番屋敷(現新潟県佐渡郡真野町新町)にて出生した。本名島倉亥之助。神童と謳われ、嘉永三年江戸に出て儒者山田寛から漢学を学ぶ。嘉永五年、幕府の奥医師松本良甫の塾に入るも、奔放な司馬は、幾度となく問題を起こし、塾をやめさせられる。やむなく下総佐倉の順天堂で学ぶが、こども辞めて佐渡へ帰る。安政四年、知己の松本良順が長崎の医学伝習所で蘭学医ボンベから西洋医学を学ぶことになり、その非凡な才能を認めていた司馬を呼び寄せ、長

崎に帯同した。司馬は、期待通り、神業とも言えるほどの上達ぶり、ポンベの講義を通訳しながら、漢文で筆記できるほどの力を持つていたという。ウィリス(William Willis)、ミルレル、ホフマン、ヨングハンス(Junglaus, T. H. 日本語表記は雍翰斯)らの日本の近代医学の幕開けをしたお雇い教師の傍らには必ず、司馬がいてオランダ語・ドイツ語・フランス語・英語・中国語を操って彼らを補佐した。文久元年六月松本良順門下を「有罪除籍」(後に復籍、ポンベの書齋に無断で出入りし、蔵書を読み耽った)され、『七新薬説』の成稿を関寛齋に預けてポンベのもとを辞し平戸に移り、そこでアカエキの肝油を煎取法で製造している。明治元年新政府の成立とともに「医学校」(現東京大学医学部の前身)の三等医学教授に就任する。明治の学問は、翻訳から始まったと言われるが、司馬は明治五年、日本最初の独和辞典を編集し、また独語の塾「春風社」を開いている。明治九年、司馬はローレツ(Albrecht von Rolletz)の通訳兼医学教師として愛知県病院・医学校に赴任する。ローレツは「ウィーン医事新報」への寄稿文の中で「私の通訳兼筆頭助手である司馬氏(中略)が薬局や手許にある薬品の点検や、ラテン語のラベルを貼る仕事を引き受けてくれた」と、司馬の仕事ぶりに触れている。明治十年四月まで、この病院と医学校に勤務するが、この間、後藤新平は司馬からドイツ語を修学した(高橋昭「司馬凌海 生涯と遺跡についての若干の知見」、『日本醫史學雑誌』四六一三、三二八一—三一九頁、日本醫史學會、二〇〇〇年)。

(9) 『濱口梧陵伝』には、長崎に向かう寛齋の心情を表す次の記載がある。「当時佐藤尚中翁は実地療法に重きを置き、現今の順天堂病院を創設したるが、迂生も亦此の計画に参与したり。其の頃蘭医へボン是我が国の懇請に依り和蘭政府より派遣せられ、長崎に於いて西洋医学の習得、殊に新き治療法の教授をなし居たり。松本順翁は早くも長崎に赴きて之に入門し居たるが、尚中翁も之に就きて新き医学を学ぶの意志あり、予に向かつて同行を勧めたるより、予は此の事を梧陵翁に相談したるに、翁は直に快諾されたるを以て、予も長崎に赴き、最新の治療医学を学ぶ事となれり。斯くて長崎在学中に於ける一切の費用は勿論、家族の生計に至るまで、総て翁の支給を受くる事となれるが、『長崎は遠隔の地ゆえ何かと不便多かるべし、幸い大阪の書林秋田屋太右衛門は古くより知るものにて、且つ大阪より長崎へは時々往來の便あれば、送金の事なども秋田屋に依頼すべし』との事なりしより、予も長崎へ

赴く途次、此處に立ち寄りて万事を依頼し行けり」(二〇七—一〇八頁)。また、『七新薬』に関わる次の記述から梧陵が出版に関する費用も用立てたと考えられる。「予は長崎在学中、『七新薬説』と云へる書物を著はしたるが、之を出版して世に頒布する事を得たるは、全く秋田屋の世話に依るものにして、之も梧陵翁の依頼ありしが為なり。『七新薬説』とは当時の枢要薬七品に就て其の效害を述べたるものにして、其の頃の医界に対しては相当に有益なるものなりしが為、世間も之を認め、予も之に依りて其の名を知らるるに至れり」。

(10) 肝油の他、沃てん(ヨード)、硝酸銀、酒石酸、規尼ニギニ、珊篤尼サンドクニ、莫非モルフィ。なお、キニーネからは副作用の少ないクロロキンやメフロキン(抗マラリア予防薬)が開発されている。

(11) 井上忠『九州文化史研究所紀要』(八・九合併号、三三九—三四九頁、一九六一年)。

(12) 米田該典「中村恭安訳『ベーツ』「乾薬韻府」について」(『適塾』二八号、八三—八七頁、適塾記念会、一九九五年)。

(13) 緒方洪庵の安政六年九月十二日付けの書翰。

(14) 小野忠義「肝油の産業技術史的研究(一)」日本における肝油の伝来と製造起源」(『技術と文明』七—二、一—三三頁、日本産業技術史学会、一九九二年)。

(15) 小野忠義「日本における肝油製造技術史の研究(要旨)」(京都大学、博士(農学)、二四三〇、二〇〇二年)。

(16) カスバル・スハルブルヘル(Caspar Schamberger)は、一六四九年(慶安二)に出島蘭館の医員として来日している(大島蘭三郎「日蘭医学交流史—十七世紀における日蘭医学の交渉」、『日本醫史學雜誌』九—一、七—二二頁、日本醫史學會、一九五八年)。

(17) 曼陀羅華と草烏頭が主成分で、他に白芷びやくし、当帰、川芎を含む。

(18) 梶谷光弘「華岡青洲門人石堂鼎と妹背家」(『日本医史学雑誌』六〇—一、三七—四八頁、日本医史学会、二〇一四年)。

(19) 吉澤信夫・高橋英子・北林仲康・渡辺賢・福田謙一・齊藤力・片倉恵男・金子謙「医科歯科一元二元論の歴史的検証と現代的意義(一)前史—「医は賤業」からの脱皮と新時代への模索—」(『歯科学報』一一五—一、五一—七〇頁、東京歯科大学学会、二〇一

五年)。

(20) 森慶三・市原硬・竹林弘編『医聖華岡青洲』(三〇四―三四六頁、医聖華岡青洲先生顕彰会、一九六四年)。

(21) 三人とは次の通りである(有田医師会「有田の医療」、有田医師会70年記念史『阿提』、二二頁、二〇一七年)。

垣内純篤 栖原村 文政五年八月 松原雄蔵 湯浅村 嘉永五年二月

鳥 良山 広村 嘉永五年四月

(22) 華岡青洲は一流の医学者であるとともに、漢詩をたしなむ文化人でもあった。青洲の漢詩や書には彼の理念が見事に言い表されている。門下生が春林軒を卒業する際に渡された青洲の自画像に添えられた漢詩が次である。

竹屋蕭然鳥雀喧 風光自適臥寒村 唯思起死回生術 何望輕裘肥馬門

医師としての心構えを論じたもので「私の家の周りでは鳥が鳴き、私にはこのような田舎に住むことが合っている。ただ思うことは、瀕死の患者を救う医術のことだけである。高い着物や肥えた馬といったぜいたくは望まない」という意味である。実際、青洲の生き方はこの詩の精神そのままであり、時の紀州藩主徳川治宝より侍医となり城下に住むことを求められた時、「我仕官を望まず、山中に隠居して随意に治療いたし術を研ぎたく思うが故に……」と述べ、故郷平山での診療を続けたという(和歌山県立医科大学付属病院紀北分院「華岡青洲の紹介」 <https://www.wakayama-med.ac.jp/med/bun-in/seishu/idea.html> 最終閲覧二〇二一年一月二四日)。

(23) 土橋俊一校『福翁自伝』(講談社学芸文庫、一〇二一―一〇三頁、二〇一〇年)。

(24) 池田良輔(二八一九―一八九五)は大塩平八郎から漢学を学び、父の医業を助ける傍ら適塾で蘭医学を修める。安政四年に和歌山城近くに新設された蘭学所に洪庵の勧めで出仕し、和歌山での洋学教育が本格的に始まる。明治以降は、陸軍省に入り、西洋兵学の翻訳や航海術を用いての沿岸防備などに活躍する。日本近代薬学の基礎を築いた丹波敬三は、池田に薫陶を受けている(根本曾代子「薬学の先駆者・丹波敬三」『The Chemical Times』4、関東化学株式会社 ケミカルタイムス編集会、一九七五年)。

(25) 胡珙「『五国対照兵語字書』の研究」(北海道大学、博士(文学)、甲一一五九二、二〇一四年)。

(26) 中津藩の医師である前野良沢が中心となって、「ターヘル・アナトミア」を「誠二、艦舵とこぎナキ船ノ大海ニ乗り出セシガ如ク、茫洋トシテ寄ルベキカタナク、タダアキレニアキレテイタルマデナリ：」との志を持って翻訳したことから、蘭学発祥の地であることを記念して築地の中津藩中屋敷跡に建てられた「蘭学の泉はここに」の碑がある。奇しくも福澤が蘭書を教えた始まった場所、また「事始」と出会った時に塾と住居を構えていた場所でもあった。福澤は、杉田玄白の『蘭東事始』を『蘭学事始』として明治二年出版した如く、良沢達の蘭学のパイオニアとしての苦勞に大いに感銘していた。福澤は、その功績を称えるべくこの地に「蘭化堂設立の目論見書」(『福澤諭吉全集』第二〇巻、三八七頁、岩波書店、一九七二)というものを記しているという。同地に福澤の蘭学塾が作られこの場所が、「慶応義塾発祥の地」ともなる運命の巡り合わせに驚くばかりである。中津藩は良沢のみならず、藩主奥平昌高の蘭和、和蘭辞書の出版、シーボルトとの交流、村上玄水の解剖、辛島正庵の種痘、田代基徳の近代外科学と蘭学に縁の業績が多く、福澤と蘭学との関わりは決して偶然ではないことが最近知られてきた。福澤が、蘭学や西洋医学に旺盛なる興味を示すのも、中津の医学史を紐解けば容易に理解できる(土屋雅春著『医者のみた福澤諭吉』、中央公論新社、一九九六年)。

(27) 栖原村垣内家四代心了の時に、湯浅村に分家する。分家した垣内家二代教念の三男恪斎が四代北圃茂兵衛を継ぐ頃には日本橋で出版業も兼ね、特に武鑑(武士の名鑑)や絵地図で知られるようになる。書林名として「須原屋茂兵衛」以外にも「北畠茂兵衛」を使用していた。

(28) 栖原村垣内本家が、その十二代目以降「菊池」に復姓する。梧陵と親交のあった菊池海莊(漢琴)は本家八代義同の次男淡斎が継いだ新家に次男として生まれる。『濱口梧陵伝』の作成に情報提供した早稲田大学教授菊池三九郎(晩香)は海莊の孫であり、『慶應義塾出身名流列伝』には「福澤先生の人と為りを敬慕し…明治二十四年慶應義塾正科を卒業」とある。南紀菊池家氏系譜については、菊池三九郎著『黄花片影』(一九一八)を参照のこと。なお、東京大学史料編纂所に八千点の垣内家・菊池家文書が保管されている。

(29) 湯浅村池永右馬太郎家を相続したのが四代北圃茂兵衛(恪斎)であり、その兄恭通のひ孫が梧陵に嫁いだのが「まつ」である。

- (30) 前掲注(21)有田医師会「有田の医療」、一五七二頁。
- (31) 飯田鼎「幕末・維新の時期における知識人、その思想と行動」(『三田学会雑誌』九五―一、一―二六頁、慶應義塾経済学会、二〇〇二年)。
- (32) 湯浅村大庄屋数見清七は嘉永六年(一八五三)、菊池海荘と相談して、大砲の鑄造に奔走し、六斤砲三門とテレゲンホイッスル砲一門を造って、広浦天王の浜に配備した(『湯浅町誌』、八二〇頁、一九六七年)。数見家は、現在も湯浅町で醤油などの販売を行っている。
- (33) 鈴木要吾『松山棟庵先生伝』(松山病院、一九四三年)。
- (34) この間、福澤が米国から持ち帰ったプリント(Austin Flint)著『内科全書』(熱病編)をわずか二ヶ月で翻訳し『窒扶斯新論』(一八六八年)として出版した。我が国最初の英語医学書の翻訳出版である(『和歌山県ふるさとアーカイブ』紀の国の先人たち 松山棟庵 <https://wave.pref.wakayama.lg.jp/bunka-archiv/senjū/matuyamah.html> 最終閲覧二〇二一年十一月一〇日)。
- (35) 慶應義塾医学所が創設された経緯は、福澤のふとした発意から生まれたようである。或る日、紀州出身の前田政四郎という塾生が、医者になるにはどうしてもドイツ語を学ばねばならない、塾にはその便がないので他の学校に移りたいと述べたところ、福澤は医学を学ぶのに何もドイツ語でなければならぬ理由はあるまい、英語でも十分修得が可能で、慶應でも、英語で医学の修得ができる学校の設置をこの際考えてみたいということになった。早速三田の福澤邸内に住んでいた松山棟庵を呼んで相談し、その結果が医学所の誕生となった(『慶應義塾豆百科』二三、慶應義塾医学所 <https://www.keio.ac.jp/ja/about/history/encyclopedia/23.html> 最終閲覧二〇二一年一〇月二四日)。
- (36) 影山昇「御製にみる明治天皇の教育思想」(『東京水産大学論集』三四、二四一―一a、東京水産大学、一九九九年)。
- (37) 安田健次郎「慶應義塾大学医学所と大学医学部の創設…自然科学教育の重視」(『慶應医学』八五―二、七九―一〇九頁、慶應医学会、二〇〇九年)。

- (38) プロシヤ陸軍上等軍医正レオホポルド・ミルレル (Benjamin Carl Leopold Müller) と海軍軍医正テオドール・ホフマン (Theodor Eduard Hoffmann)。
- (39) 五校とは、ペンシルベニア大学(一七六五年創立)、キングス・カレッジ(一七六七年、後のコロンビア大学)、ハーバード大学(一七八二年)、ダートマス・カレッジ(一七九八年)、トランシルヴェニア・カレッジ(一七八九年)である。
- (40) 拙稿「濱口梧陵と海を渡った先駆者たち」(『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』四〇、五三―八二頁、二〇一九年)。
- (41) 安田健次郎「西洋医学の伝来とドイツ医学の選択」(『慶應医学』八四―二、六九―八四頁、慶應医学会、二〇〇七年)。
- (42) Johns Hopkins School of Hygiene and Public Health(現Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health)。
- (43) ロックフェラー財団 ジョーンズ・ホプキンス大学 <https://rockfound.rockarch.org/ja/public-health-at-johns-hopkins> (最終閲覧二〇二一年一月二四日)。
- (44) 慶応義塾大学医学部 衛生学公衆衛生学教室「黎明期」<https://keiopublichealth.jp/about/history.html> (最終閲覧二〇二一年一月二四日)。
- (45) 前田辰雄『実用育牛大鑑』(裳華房、一九〇八年)。
- (46) 野間万里子「近代日本における肉食受容過程の分析」(『農業史研究』四〇、七七―八八頁、日本農業史学会、二〇〇六年)。
- (47) 庚寅、詔諸国曰「自今以後、制諸漁獵者、莫造檻弄及施機槍等之類。亦、四月朔以後九月卅日以前、莫置比彌沙伎理・梁。且、莫食牛馬大猿鶏之宍。以外不在禁例。若有犯者罪之。」(『日本書紀』二八、天武天皇四十五、狩獵の制約・肉食の禁止)。
- (48) 藤岡恵子、野村祐一「人と熱との関わりの足跡(その4)―冷たさを届ける…天然氷の採取と輸送―」(『伝熱』五八―二四三、三六一―四一頁、日本伝熱学会、二〇一九年)。
- (49) ニチレイ「氷と暮らしの物語」中川嘉兵衛と氷業はじまり https://www.nichirei.co.jp/koras/category/ice_history/001.html (最終閲覧二〇二一年一月二四日)。

- (50) 美味求真.com 中川嘉兵衛 https://bimikyushin.com/chapter_4/04_ref/nakagawah.html (最終閲覧2021年10月24日)。
- (51) San Luis Obispo Tribune (Weekly), Volume XVI, Number 46, 12 June 1885
- (52) Daily Alta California, Volume 37, Number 12598, 10 October 1884
- (53) 南方熊楠が在籍したランシングの農学校の一八八三―一八八四年在校生名簿に Michitaro Tsuda という日本人らしい名前が記されていて、この人物が津田出の長男道太郎であることが確認されている。津田出は明治初年の和歌山藩の大参事として梧陵と共に藩政改革に功労のあった人物で和歌山藩の近代陸軍の基礎を築いた。大蔵少輔として明治新政府に転ずるも、辞任して一八七八年からアメリカ式大農法の試みを始める。『熊楠日記』一八八六年十一月二〇日に「朝津田安麿氏と共に其兄道太郎氏を訪、米田事情を聞く」とあり、農学校入学には津田道太郎を保証人に立てている(武内善信『闘う南方熊楠』、六五―六六頁、勉誠出版、二〇一二年)。梧陵を含む紀州人の行動力と好奇心の現れと考える。
- (54) 角倉賀道(一八五七―一九二七)は小児科医で天然痘ワクチンの製造を目的に現在の巣鴨付近に牧場を開設した(一八九八年)。NP O 法人チーズプロフェッショナル協会 https://www.cheese-professional.com/article/column/detail.php?KJL_ID=1287 (最終閲覧2021年10月24日)。
- (55) 明治三十三年四月七日内務省令第十五号。
- (56) 矢澤好幸「明治期の東京に於ける牛乳事業の発展と経過の考察」(『乳の社会文化学術研究報告書二〇一三年度』、五六―七八頁、乳の社会文化ネットワーク、二〇一四年)。
- (57) 松本泰明「近世・近代移行期の大蔵書 和歌山県立図書館所蔵『濱口梧陵文庫』」(『和歌山県立図書館紀要』二三、一―六八頁、和歌山県立文書館、二〇二一年)。
- (58) 阿部安成「健康、衛生、あるいは病という歴史認識」(『一橋論叢』一一六―二、四一三―四三一頁、一橋大学一橋学会、一九九六年)。

- (59) 『国立衛生試験所百年史』(五五頁、一九七五年)。
- (60) 明治七年二月十全医院と改称する。現在の横浜市立大学医学部病院である。
- (61) 田中祥夫「明治6年制定『家作建方条目』(神奈川県布達)の成立事情」(『日本建築学会計画系論文報告集』四五〇、日本建築学会、一九九三年)。
- (62) 山内慶太「福澤諭吉をめぐる人々(その39) ドクトル・シモンズ」(『三田評論』一二三三、四四一四七頁、慶應義塾大学出版会、二〇一九年)。
- (63) 上安祥子「明治6年の公園公布と『健康』」(『白鷗大学論集』三二一一、二〇一七年)。
- (64) 凡例には次の記述がある。
 語中に和訳なき者は、或は本邦に全く名物無き者有り。或は適ま類似の者有りと雖ども穩当未だ詳かならざるを以て、故に妄りに訳を下さず。義訳は主として英語の意を存す。故に間ま原訳と齟齬する者有り
- (65) 竹山重光「『健康』の概念化」(『応用倫理学各分野の基本的諸概念に関する規範倫理的及びメタ倫理学的研究』平成十六・一七年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)平成一六年度研究成果報告書、六五一七七頁、研究代表者坂井昭宏北海道大学教授、二〇〇五年)。
- (66) 「長与専齋副会頭の創立総会での発会祝詞」大日本私立衛生会雑誌第一号より。
- (67) 瀧澤利行「大日本私立衛生会の民族衛生観」(『民族衛生』五七一五、二〇二二二二頁、日本民族衛生学会、一九九一年)。
- (68) 拙稿「新型コロナウイルス感染症現地報告」(『地理』六五一六、六六〇七六頁、古今書院、二〇二〇年)。
- (69) むらさき(醬油)が現す「うま味」の道を究め、この世にいくつもの貴重な贈り物を残した故國中明氏が好んだ歌である(別府輝彦「國中明先生を悼む」、『化学と生物』五一一八、五七四一五七五頁、日本農芸化学会、二〇一三年)。青洲が若き医生、門人に伝えた医療の究極の目的である「活物窮理」にも通じる。

(70) 「シールドウリジン」は、新型コロナウイルスのmRNAを構成する物質の一つで、mRNAを体内に投与すると、免疫反応により炎症を起こすことから、ワクチンや医薬品としての実用化は難しいと考えられていた。しかし二〇〇五年、新型コロナウイルスのmRNAワクチンを開発研究したドイツのピオンテック社のカタリン・カリコ上級副社長と、米国ペンシルベニア大学のドリユール・ワイスマン教授の二人は、mRNAをこの「シールドウリジン」で構成すれば炎症が抑えられるという論文を世に出し、「シールドウリジン」で構成されたmRNAを使うことで、免疫機能を回避し、目的のタンパク質を生成する、効果の高い新型コロナウイルスが開発された(ヤマサ醬油、二〇二二年一月二十二日ニュースリリース <https://www.yamasa.com/news/2021/> 弊社医薬化成品事業部における新型コロナウイルス〈最終閲覧二〇二二年十一月一〇日〉)。

